兄弟

BROTHERS & KEEPERS

刑務所の内と外で

ジョン・ワイドマン

千本健一郎訳

晶文社

著者について

ジョン・エドガー・ワイドマン

一九四一年生まれ。ペンシルベニア大学、オックスフォード大学卒業。八三年に小説『昨日、お前を迎えにやった』で、ペン＝フォークナー賞を受賞。現在、ワイオミング大学でアメリカ黒人文学、英文学、創作法を教えている。

訳者について

千本健一郎（せんぼん・けんいちろう）

一九三五年東京生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。「朝日ジャーナル」編集委員。訳書―ジョーン・ディディオン『ラテンアメリカの小さな国』、アモス・オズ『イスラエルに生きる人々』（晶文社）ほか。

兄弟（きょうだい）　刑務所の内と外で

一九八八年一月二五日発行

著者　ジョン・ワイドマン

訳者　千本健一郎

発行者　株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二―一―一二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六―六二七九九

中央精版印刷・美行製本

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。

兄弟

刑務所の内と外で

ジョン・ワイドマン　千本健一郎訳

晶文社

John Edgar Wideman:
BROTHERS AND KEEPERS
Original Copyright © 1984
by John Edgar Wideman
Published in Japan, 1988
by Shobun-Sha Publisher, Tokyo.
Japanese translation rights arranged with
John Edgar Wideman, c/o Andrew Wylie Agency, New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もくじ

まえがき　8
訪問　11
おれたちの時代　103
服役　295
追記　417
訳者あとがき　425

ブックデザイン　平野甲賀

ベット・ワイドマンへ

彼女の愛情と自由への美しい夢が子どもたち全員をつつんでいる

まえがき

この本のスタイルとここに盛りこまれた肉声は、ざっと四年前に本腰を入れて始めたあるやりとりを記録しておこうという試みである。弟と私が二人の生き方について語り合うのだ。

弟の話を聞きとるために、私は刑務所にいる彼を訪ね、彼の思いのたけに耳を傾けた。はじめは二、三メモもとった――名前や日付や事件の前後関係などについて――が、やがて、弟の言うことがよくのみこめるようになると、記憶のあざやかなうちに、聞いたことを紙の上に再現するようになった。ロビーは私が書いたものを読んで次の面会日や手紙などで、あれこれ言ってよこした。彼が注文したり訂正したりする個所はふつう、事実関係にかぎられていた。とはいえ、彼のさらに大きな問題意識、真実や正確さについての感覚、彼なりの語り口への配慮、それに彼の手紙や詩からの貴重な引用などが、最終稿に大量につけ加わった。私は作家として、語られたものを文字に移して作品を創る作業はさんざんやってきたから、テープレコーダーを使うよりもフィクションを書くときに身につけた語りものの手法を借りることについては、はるかに自信をもっていた。

私は刑務所や囚人についての本を読みあさり、家族の者たち、とりわけ母とも長いこと話し合い、裁判記録から新聞のとじこみ、警察の報告書までじっくり目を通して事件を再現し、自分なりに理解

を深めた。私はこうした関係者の方がたに深くお礼を申しあげるが、同時に、記憶と想像力、感情、それに事実がまじりあったこの最終的な作品についての責任は、すべて私にある。一人の若い男を死なせ、三人を終身刑に追いやった一連のおぞましい事態を再現するのは、なんとも胸の痛む作業ではある。この話からいささかでも学べる点があれば、また、この悲しみと荒廃から救えるものがあれば、と希望しつつ、私は正確さと率直さをめざした。本文に登場する人名については、本人のプライバシーを尊重して一部、仮名にしたものもある。

ジョン・エドガー・ワイドマン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

訪

問

おれがまだチビのころ、そう、六つか七つぐらいのころだ。あんたも知ってるウォルナット街やコープランド街をぶらつく癖があってね。歩いてると車が目について、空想で買うんだけど、五セントか一〇セント玉がいくつかって値段なのさ。でっかい車は一〇セント、小さいのは五セント、おれが大好きなのは二五セントってわけだ。で、大きくなって、こいつが癖になった。長いこと、おれは、ポケットのなかの小銭で車を買ったのさ。小銭といっても当時はたいしてなかったがね。

こうなると、なんとか手に入れたいと思った。だけどそれ以上に問題なのは、物ごと全体にたいする見方だった。——非現実的とでもいうのか——おれは、楽ちんに暮らせればいいと思ってたみたいだ。だから心得ちがいにも何でも楽をしようとして、目いっぱい力をつくさなけりゃ、けっこうなことなんてあり得ないなどとは、夢思わなかった。

おれの言いたいのは、こうさ。ああやって生きながら、物ごとの現実の姿というよりは、こうあってほしいというゆがんだ考え方を身につけてたってことだ。いつだって楽でいたかった。だから現実と向きあうどころか、現実とすっかり手を切っちまった。努力したり働いたりなんて、しんどいことはやめて、底抜けに遊びまわろうとしたよ。そっちは、いつだって楽だったからな。

ぼくは母からの電話で、はじめてそのニュースを知った。弟のロビーと彼の友人二人が強盗をはたらいて人を一人殺した、というのだ。ロビーは逃亡中で、武装強盗・殺人で指名手配をうけていた。警察が彼を追っており、その犯行からみてロビーは射殺されてもいいことになっていた。ぼくが弟の世界との間にもうけていた距離の壁が一挙にくずれた。ワイオミング州ララミーとペンシルベニア州ピッツバーグとの間の二千マイルも、この数年間、ぼくがわざと弟の消息を知らずにいたことも、あちこちわたり歩いて姿をくらましていたことも、ある単純な真理を変えてはいなかった。ぼくがそれほど早く、それほど遠くへ逃げおおせるわけがない、という事実だ。ロビーは、ぼくの中にいた。また、命からがら逃げてどこにいようと、ロビーはぼくの影を引きずっていた。

弟の犯行を知った一九七五年一一月のその日と、彼がララミーに現れた二月の午後との間には、三カ月近い時間が流れることになる。その間、家族はだれ一人、ロビーがどこにいるのか知らなかった。当初のショックと信じられない思いとがおさまってからは、ピッツバーグに残された者たちはやむをえず腰を落ち着けて、じっくり気を張って待つことにした。お祈りもした。家族や友人関係に話がひろがるにつれて、待つことと祈ることについて長いこと経験をつんできたこの連中は、次の一撃にたいして心の準備をはじめた。母のように、一番、打撃をうけそうな人たちには、特に目を光らせることにした。最善の事態が望ましかったが、最悪のそれが予想された。それにだれ一人として、どうなれば一番いいのか、見当もつかなかった。便りのないのがよい便り、だった。便りがなければ、ロビーはまだ捕まっていないわけだし、何がなくともロビーはまだ自由でいるというわけだった。だが、何も分からなければかげりが増し不安もつのる道理で、時にはあの母が思わず、ロビーが逮捕されま

すようにと祈ったりすることもあった。刑務所の中のほうが外にいるより安全にみえたのだ。ロビーが自由でいるかぎり、だれかを傷つけたり、殺されたりする可能性があった。母をはじめロビーを愛する者にすれば、彼が自由でいられる代償として四六時中、食いいるような不安にさらされっぱなしで、いつ電話が鳴るか、いまにもテレビ画面にパッとニュース速報が出て、犯人あるいは犠牲者はロバート・ワイドマンの模様と伝えるのではないか、などと気が気ではなかった。

ぼくはワイオミング州ララミーに住んでいたので、ピッツバーグにいる家族につきまとっていた切迫感や、不幸が押し寄せてくるといった感じからは、なんとか自由でいられた。ぼくの気持ちと家族のそれとの違いは、ロビーを忘れているなどということではさらさらなく、ぼくが彼をどんなふうに記憶しているかという点だった。突然、恐怖や怒りや後悔の念に襲われたら、授業もパーティーもあったものではなく、一人で引きこもって憂愁と孤独の日々を送っていたかもしれない。けれどぼくは、さいわいなことに、時折り心の痛みと向き合う余裕があった。冬が深まり、雪が山に降りつもるにつれて、ぼくの中にはくじけずにすむような、ある確信が生まれていた。最悪の事態にはならないだろう。ロビーは、警官と泥棒のむちゃな撃ち合いでやられるわけはない。彼の足どりがぼくに向かっているのは、分かっていたからだ。とにかく、何があっても、ぼくたちは合流するはずだった。ぼくは、彼が着くのを待っていた。きっと着くはずだ。そしてそれが確実なだけに、彼の身の安全については心配しなかった。

それはたぶん、希望的観測、あるいはぼくたちの間に横たわる距離と沈黙の歳月が縮まってほしいという気持ちだったのかもしれない。だがぼくは、彼と再会をはたすことについては、まるで疑って

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com